

最終階級

伍長

職歴

昭和二十六年二月 兄弟にて、ブラザー印刷社創立

昭和二十九年 プラザー印刷株式会社設立 現在に至る

平成二（一九九〇）年 社長退職会長に就任

その他

平成四年 愛知県教育振興会の派遣講師

同年 愛知県教育委員会生涯学習課派遣講師

平成十五年 愛知県教育振興会講師退任

平成十八年 岡崎市教育文化賞を受ける

平成十九年 愛知県教育委員会生涯学習講師辞任

（愛知県 河村 廣康）

シベリア抑留記

愛知県 齊藤 弘

私は思えば、昭和二十（一九四五）年三月現役兵として小田原駅に集合。列車に乗車後大阪で下車。ここで軍服の支給を受け、兵隊姿となりました。その後、列車に乗り博多駅まで行き、ここで乗船したがどこに向うのか分からなかった。

船が着いたのは朝鮮の釜山港だった。そこでまた、汽車に乗りました。列車は北へ北へとどんどん走りました。そして着いた所は孫^{ソン}呉^ゴの部隊でした。ここで通信兵としての教育を受けました。教育が終了して、昭和二十年八月九日黒河^{コッパ}の通信所の交代要員として派遣されることになっていましたが、日ソ戦争が始まり、攻撃をうけて、本隊は北安に後退しました。しかし私たちの中隊は終戦までソ連軍と戦闘を続けておりました。

停戦命令がきて、武装解除され、ソ連兵の銃剣

に威嚇され、食べ物とてほとんど無くふらふらになりながら強制連行されました。ソ連領に入り着いた所は、ライチハという。その第十九収容所に入れられました。作業は露天掘りの炭鉱で、私はモッコで貨車に石炭を運ぶ仕事をさせられました。そればかりではなく、三十人一組で鉄道線路を移動させる仕事もしました。

一日で黒パンがゲンコツほどの大きさのものと、飯盒の蓋にシャブシャブのスープ三杯。これがマインス三〇度以上の厳寒期で、仕事を強制されたので、急性肺炎と栄養失調になり、戦友はバタバタと倒れてゆきました。私も同じように痩せ細り急性肺炎になりました。そして死の一步前までいきましたが、どうにか生き延びることができました。

入院していたころは、両隣の戦友が今日も一人、明日も一人と死んでゆきますので、明日は自分だと何度となく思っていました。私の命が助かったのは、日本の看護婦さんがいて、熱に浮かされて

いる私に付きつきりで温湿布をして看病してくれただお陰です。この看護婦さんあっての今の私がこうして生きている大恩人です、一生忘れる事はできません。

入浴は月一回で、ボイラー室でシャワーを浴びていました。その折、衣服はシラミの温床になっていたのを蒸気熱で滅菌消毒してくれていましたが、着たきりですからシラミとは復員するまで縁が切れなかった。幸いなことに、環境は悪かったが伝染病に罹る者はいなかった。

日本とは一回ほど文通ができました。両親や親戚にと五通出したのですが、帰国して分かったが、届いていたのは叔父さんの所への一通だけだった。ソ連側は食料が少ないために、寒さと重労働と栄養失調で死ぬ者が続出したことで、二年目からは食事の量が増やされて、死亡する者もぐんと少なくなりました。

そのころになって、私が電気工事の経験者と分り、工場などの電気工事をさせられ、この仕事

は帰国まで続きました。工場には満州から持ち込まれた日本製の機械が沢山ありました。

ほかの者たちは、ここよりもっとノルマのきつい作業をさせられる収容所に送られるということがありましたが、シベリアに抑留されてから四年目の昭和二十三年初めに、中隊から一人共産主義の教育を受けないと、日本に帰してくれないというので、私が行かされました。

教育が終った九月三日にダモイの命令が出て、シベリア鉄道に乗りナホトカに向かいました。約五十日近くかかりました。そして十一月十四日に舞鶴に上陸する事ができました。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十四年三月二十八日

現住所 愛知県瀬戸市荻山台

旧住所 名古屋市中区菅原町

最終学歴 名古屋電気学校 夜間部卒業

軍歴 昭和二十年三月 関東軍 軍司令部通

信部隊

昭和二十年八月十五日 孫呉にて終戦

一等兵

抑留先 ライチハ第十九収容所

復員先 昭和二十三年十一月十四日 舞鶴上陸

復員後 東海電気工事株式会社復職 定年退職

(愛知県 河村 廣康)